

伊勢市教育研究所

<http://www.ise-mie.ed.jp/~kenkyusyo/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

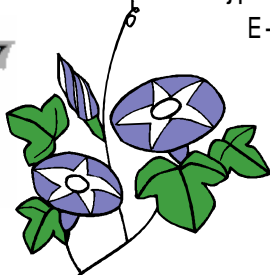
E-mail:kyo-kenkyu@city.ise.mie.jp

平成 25 年 8 月 20 日 発行

伊勢市教育研究所

伊勢市小俣町元町 540 番地

# たより



第 9 号

平成 25 年度夏季教職員研修講座

## 【二瓶弘行先生を迎えて（筑波大学附属小学校教諭）】

### 師範授業「詩の授業」 講演会「確かな言葉の力を育む詩の授業」

7 月 31 日(水)、今年度も二瓶弘行先生をお迎えし、研修講座を開催しました。  
今回のテーマは「詩の授業」。190 名の先生方、講座満足度 100%の講座となりました。

T 4 つの詩を挙げたのは二瓶ちゃんです。二瓶ちゃんの知っている詩は何千とあります。ここにある「百編の詩」という詩集は二瓶ちゃんが知っている詩のうち、自分のクラスの子どもたちに読んでほしい 100 編を選んで載せたものです。最後の 2 編は二瓶ちゃんが作った詩です。何千って知っている詩のうち、このクラスに選んだ 4 つは適当に選んだんじゃない。4 つの詩を読み比べると、詩の作り方、詩の書き方が同じなんだ。作者は違うんだぞ。5 年生だからちょっと難しい言葉でいうと、「詩の表現技法」が使われているんだ。詩人たちは、適当に言葉を並べてるんじゃない。いろんな表現の仕方を考えて作ってる。みんなある同じ表現の技法を使ってる。3 つさらに 4 つ読み比べると同じ表現の仕方をしてるのが見えてくる。目で読みながら線を引いたりメモをしたりしてごらん。二瓶ちゃんが「やめ。」というまで考えてごらん。いいですか。

T (机間指導しながら) 気付いたことをメモをすることは大事なことなんだ。

T こういうことは家でも考えられるね。一人で。でも一人でやっても気付けないことがあるだろ。家と違って学校には仲間がいる。人の意見を聞くと「あっ、そうなのか。」と自分の気付きになるだろ。ということは、自分の気付いたことを仲間に伝えてあげることはとても大切なんだ。いいか。では、何か気付きのあった人。」

師範授業のクラスは小俣小学校の 5 年 A 組 (坂倉学級)。8:40 に図書室で二瓶先生と初顔合わせの後、9:00 に授業開始。「みんな久しぶり！」という二瓶先生の声かけで授業が始まりました。

授業の題材となったのは 4 編の詩です。選択された 4 編には必然性がありました。その解説を二瓶先生は丁寧になされました。

子どもたちははじめに「4 つの詩に使われている同じ表現技法」を探しました。机間指導しながら、二瓶先生は自分自身で考えて気付くことと、気付いたことを仲間に伝えることの大切さについて子どもたちに話されました。





T 今日はくり返しの表現のことは見てきました。繰り返している言葉は何かということにみんなは気付いたのだけど、4つ目の詩は連そのものを繰り返して作っているね。ということは、この詩は3連でなくてもおかしくない。4連の詩になってもおかしくない。5連まであってもおかしくないだろ。

(配付シートの) の3行が見えるだろ? 「くり返しの表現」を使っているとどんどん続くと感じる。しかし、最後の連はこれが来ないといけない。ここに3行書けそうか? 3行書けたらすごいわ。

T 自分だけの3連だね。紙がほしい人? もらったらずくに書いてよし。書いてみな。「一」は書けるよな。単位が分からなかったら「一つ」と書いてもいい。

C 「一本の木からイスが生まれる 家が生まれる」

T 「一本の木から...」いいね。書けない人はまねしてみな。いいと思ったら、そうしていいよ。

C 「一かたまりのアメからりゅうが生まれる」とかが生まれる」

C 「一本の丸太からバットが生まれる 根付が生まれる」

T よし、時間がなくなったからここまでにしよう。プリントを先生に渡しておくから今度時間があったら自分で書いてみなさい。

C 早っ!

T ちょっとこっち見てみ。二瓶ちゃんの作った3連を見せてあげます。

一つぶの種から  
花が生まれる  
実が生まれる

拍手ありがとう。「一つぶ」とあるのは種だからな。でもこの3行だめなんだよ。どうしてだかわかる?

C1 形を変えて作ったもので、種の存在がなくなつて別のものになったから。

C2 最後の「わたしたちの手から」とある。「一枚の紙から」船や飛行機はできて、「一かたまりのねん土から」象やつぼができるけど、一つぶの種は自分で作れないから。

T 「わたしたちの手から」とあるのに、二瓶ちゃんのは違うんだな。種は自分の力で花を咲かせて実をつけるな。この3行はくり返しの方法からは満点だけど、全体の意味からはだめなんだね。みんなももう一回書いた詩を見直すんだぞ。でも、「こんなふうに考えたらおかしくない。」という方法はないのかな。



の詩でさらに「くり返しの表現」について学んだ後、3連目が空欄になったワークシートを配付して、3行を自分で創作する発展段階に入りました。

短時間の取り組みでしたが、子どもたちは創作活動に集中しました。「自分だけの3連」という二瓶先生の言葉が印象的でした。「一本の木」「一本の丸太」「一かたまりのアメ」など、子どもたちの発想は広がりました。

二瓶先生の創作した3連も提示されました。しかし、そこで新たに問題提起がありました。「二瓶ちゃんの詩にはだめなところがある。」というのです。子どもたちは「えっ?」と反応した後、その理由を探します。そして出てきたのがC1「種は花や実になった後に存在がなくなるからいけない。」という意見、C2「最終連の「わたしたちの手から」とあることが根拠となり、一行目の「一の」から生まれる(作れる)ものでなければならない。」という意見です。

そしてさらに、「こう考えたら二瓶ちゃんの詩は間違いではないという考え方はないか?」という問いかけです。それには「タンポポは自分で綿毛を飛ばして花を咲かせるけど、畑で育つものは私たちが種をまかないと自分では花を咲かせたり実を付けたりすることができない。」という意見が出たのです。二瓶先生は、「自分とこのじいちゃんやばあちゃんが、一生懸命畑で育てて花を咲かせて収穫してるな。あの人たちにとっては、種から育てて花や実が生まれるということなんだな。そう考えれば間違いではないんだな。」と続けられました。



二瓶先生は最後に、「今度詩を読むときは、どの言葉が繰り返されているのか、なぜ繰り返されているのかを考えてごらん。詩には「くり返し」「倒置法」「擬人法」いろんな表現の方法が使われているんだよ。4 つ目の詩は、なんで『つくりだす』ではなくて『生まれる』なのか。『生まれる』という言葉が大事な言葉なんだ。」と締めくくられました。次に記すのは、二瓶先生が設定された【この授業で育てたい力】です。

自分の考え・意見、読みを言葉を根拠につくり、仲間とともに、言葉を通して自らの考え・意見・読みを表現し合う「言葉の力」

小俣小学校 5 年 A 組（坂倉学級）の子どもたちは、見事に「言葉の力」をつけてくれました。その子どもたちの頑張りを褒めて、二瓶先生が自主編成した詩集がプレゼントされました。夏休み明けには、大勢の子どもたちがこの詩集の中から大好きな詩を選んで、読み始めてくれるはずですよ。



### 「確かな言葉の力を育む詩の授業」づくりのために

師範授業後は会場を小俣図書館に移し、金子みすゞの「ふしぎ」を題材に講義をしていただきました。心に残る提案をあげてみます。



「視写」は大切な活動である。

詩とは作者によって精いっぱい言葉が吟味されたもの。自分のクラスでは、視写のために冊子を子どもたちに渡している。

全ての漢字にふり仮名をふることによって、1 年生からでも実践可能。全ての言葉の意味が分かっているかどうかは別として、声に出して読みたい詩を子どもたちは視写する。... 私たち参加者も二瓶先生の指示で「ふしぎ」を視写しました。

「一定時間でなかなか書けない子どももいるはず。『下手でも丁寧に写す』ということは極めて重要な力。」と二瓶先生。「視写でその力を保証するのが国語です。」とも話されました。

日常的に言語活動の基礎を大事にすべきである。

日常的に 5 年 A 組ではしっかりと言語活動に取り組んでいることが分かり、すばらしかったと二瓶先生。

読み手として読むことが大切である。

誰かが読むのをみんなですべてで聞くこと。誰かの音声表現が大事。しーんとした中で誰かが読んでくれた詩をみんなですべてで聞くことを味わいたい。意見を発表することはたいへんでも、読むことはできる。みんなが音読するクラスを目指したい。

授業の中では素直な（自然な）反応を伝え合うことが大切である。

「〇〇さんと同じです。」などと型にはめる必要はない。型にはめようとするとな不自然なやりとりになる。仲間の意見にうなずける子ども、目で聞ける子どもを育てたい。

一人読み（一人で悩む）の時間は 5 分は保証したい。

「自分の気付きを出そうじゃないか。」と投げかけると、「早くみんなと出し合ってみよう。」となるはず。自分の考えを書いた後、伝えるには勇気が必要。誰かに一回話してみようという点で、ペア対話（ワイワイタイム）は有効である。

「『夕顔』って何？」という問いに、何人かの参加者が挙手で答えます。「朝顔のような花です。」「朝顔よりも大ぶりの、つぼみがよじれている花です。」「夕方開きます。」「白のイメージです。」と発言し合うことで、イメージを共有しました。そして、本題の「詩の表現の工夫を考えてみよう」に入ります。

ふしぎ  
金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、  
黒い雲からふる雨が、  
銀にひかっていることが。  
わたしはふしぎでたまらない、  
青いくわの葉たべている、  
かいこが白くなることが。  
わたしはふしぎでたまらない、  
だれもいじらぬいじらぬ夕顔が、  
ひとりではらりと開くのが。  
わたしはふしぎでたまらない、  
たれにきいてもわらって、  
あたりまえだ、ということが。

「わたしは～たまらない」などの反復法が用いられている。「それはどうしてでしょう？」という問いには、「重要なテーマだから。」「伝えたいことを強調したいから。」「本当に不思議でたまらないから。」と発言が続きます。

倒置法が用いられている。

リズム（七五調）（わたしはふしぎで / たまらない くら  
いくもから / ふるあめが...）

色の対比（黒・銀、青・白、夕顔（白）・夕暮れの色）...4 連には色が無い。意味やイメージが大きく違うものを並べて表現している。その工夫によって色の不思議さがよりかもし出されている。とりわけ夕暮れの暗がりの中に咲く夕顔の白さは際立つ。

擬人法、 擬態語

最も興味深いのは「連の構成の仕方」「結びの連の大切さ」です。結びの連（第4連）に注目すると、自然現象への作者の不思議が、それらの不思議な現象を不思議にとらえない周囲の人々への不思議へと「不思議の対象が転換」されていることが分かるのです。二瓶先生は「最後の連をしっかりと読みなさい。」と続けます。子どもたちが師範授業の最後に取り組んだ作品「無題」でも、やはり結びの連に詩の主題が表現されていたことを指摘されました。一編の詩を学習した後、さらにもう一編選択して単元を組むことで、学んだことが活用できると締めくくられました。

楽しい講義の時間があっという間に過ぎてしまいました。

小俣小学校の先生方、ご協力いただきありがとうございました。

【参加者のアンケートより】

とてもすてきな授業でした。とてもすてきな子どもたちでした。三連目の詩の考え方、結びの連の大切さがよく分かりました。金子さんの「ふしぎ」の詩、とてもすてきでした。また授業で使ってみたいです。また来年もお話を聞きたいです。

二瓶先生の目指す（ねらう）ものにブレがなく、子どもたちを引き込む力があるのを感じました。詩の技法だけでなく、内容理解にまでいけた道すがらとても自然でもっともっと授業が見たかったです。

詩の授業はこんなにも楽しく子どもたちとできるんだと教えてもらいました。時間を見て、子どもたちが驚くくらい集中していたことに感心しました。2学期初めに早速市の授業があります。ぜひ子どもたちが楽しいと思える授業がしたいです。

毎年目からウロコです。久しぶりに、細かく読解する機会を与えて下さり満足です。充実感を感じています。また一人での解釈のみでなく二瓶先生が授業でおっしゃったように、人の意見を聞いて「あっそうか。」と深めることが実感できました。

